イージーリーダー集　「森の夏　**2012**」　（下）

第六話　　きつねのおっさん

きょうは、きつねの長（おさ）さんに初めて会ったときの話です。

ところでこのおさは、狐たちの間では「おささん」がなまり「おっさん」と呼ばれています。しかし、これは人間のおじさんの「おっさん」とは　－　語源はもしかしたら同じかもしれないが　ー　ニュアンスが異なり、そのイントネーションは「おししょう（御師匠）さま」をなまって「おっしょさん」というときと同じで、おじさんの「おっさん」のイントネーションとは違っています。アクセントは「デッサン」と同じです。ですからきつねの「おっさん」は敬称であり、以下の文章はそれを念頭に入れて読んでくださらないと、私の言葉使いが妙に狐の長（おさ）をさげすんでいるような誤った印象を与える危険があります。

さて、夏も暑さがピークを越えたころ、私は久しぶりに秘密の湖を訪れました。久しぶりというのは仕事が忙しかったのと、休みの日は暑いのでエアコンのあるところ、例えば図書館とか公民館とかに行って、日中を過ごすことが多かったからです。もちろんうちにもエアコンはありますが、節電に協力することを心がけたわけです。家にいるときはできるだけエアコンを使わないようにしています。そのためほとんど裸ですごしています。それが健康にもいいことがわかったからです。

さて、公民館では盆踊りの準備と練習で時間を過ごしました。私は町内のある役をおおせつかっており、盆踊りにつきものの屋台店の管理と駐車場の管理の責任者でした。

さて、私が秘密の湖に行くことになったのは、いたちのフクスケに声をかけられたからです。森のキツネたちが私に会いたがっている、ということでした。森にキツネがいるのは見かけたことがあったので知っていましたが、いままでに声をかけられたことはなく、どちらかというとうさんくさそうに私を見ていたので、こちらも無視してきました。そしてそれは正解でした。なぜなら、昔話にたがわず、彼らは人をだます能力を持っていることがわかったからです。

フクスケは私と森を進みながら、言いました。「彼らは悪い連中ではないが、こいつは化かしやすいぞと見抜いたら、少々いたずらっぽくなって、ひとつふたつトリックをする。悪意はないが、それに引っかかると、子ぎつねからもいつまでも馬鹿にされるから気をつけな。」それはちょうどおとなしい人好きの犬でも、この人間は犬を怖がっているぞとわかると少しばかりうなってみたくなるのと同じだそうな。

森の中でも特に木立の茂った方面に私は連れて行かれました。フクスケはするすると簡単に木々の間を進んでいきましたが、私はたいへんで、何度か木の根っこにつまずいたり、頭を枝にぶつけたりしました。

それできつねの集落に着いたときには機嫌が悪くなっていて、無愛想に帽子をかぶったまま挨拶しました。こんなところまで呼ぶんでなくて、自分たちが会いに来いよ、という気持ちになっていたからです。

だけど来てよかったことがすぐにわかりました。きつねたちは口々に私に「よくいらっしゃいました。」とからだを私の足になすりつけながら挨拶します。これは猫が人を歓迎するときの挨拶方法と同じです。一段落すると、フクスケは私をある立派な毛並みをしたキツネのところに連れて行きました。それはこのきつねの集落の長（おさ）でした。

このキツネはニコニコ顔で言いました。「よくいらっしゃいました先生。フクスケ兄（あにい）から、あなたが来てくださると聞いて、みんな大喜びで、お待ちしていました。これから嫁入り行列が出ますので、ぜひ花嫁の門出を祝ってあげてください。結婚するのはわしの末娘です。花婿は荒船神社の神主です。」

荒船神社と聞いて、わたしはおやっと思った。私らが準備している、柑子町主催の盆踊りは公民館の近くの荒船神社の境内を借りて行われるのだ。この神社はお稲荷さんを拝し、狛犬の代わりに玉をくわえた狐の像が一対置かれており、どちらにも赤いスカーフがかけられていて、その姿はなかなか美しい。

「荒船神社の神主ならきのう会ってきました。あの老いぼれじいさんにあなたの娘さんを嫁がせるのですか？」
「いえいえ、神主といってもキツネのほうの神主です。稲荷神社には人間の神主がいないものがあっても、必ずキツネの神主がいます。だから荒船神社にもきつねの神主がいてなかなか将来性のある若者です。実はそこでこんど盆踊りがあるというので、キツネの子供たちに、ぜひ踊りに行かせてやりたいと思っていたところ、フクスケさんからあなたがその祭りの企画に携わってられると聞いたもので、ひとつ子供たちのお世話をお願いしたいと存じましてな。」

そのとき、なんだか霧のような雨が降り始めました。その日はとてもいい天気で太陽は照っているのですが、ふわーとした感じの雨が舞ってむして体は雨と汗で二重の湿気を帯びました。

すると「さあ、みなさんまいりましょう」という声が上がり、キツネたちは列を作り始めました。「これがキツネの嫁入りだな。」わたしは花嫁の父親との話を中断し、彼と行列を見るためにそちらに近づきました。するとどうでしょう、キツネたちはみるみる様子が変わっていきました。みんな二本足で立ち、美しい人間の衣装をまといます。するともう顔も人間ですが、きつねであることの証拠に口が深くさけており、鼻の先がちょっと黒い。あっ化けたな、わたしは声になりそうな驚きを抑えて思いました。これはすばらしい。美しい！

列に加わろうとしないきつねの長（おさ）に、「あなたは一緒に行かないのですか」と聞くと、いつの間にか目に涙を浮かべていた彼は、涙声で、「それはしきたりでない」と言いました。私が黙っていると、「こんどの荒船神社での盆踊りに、子供たちと一緒に私も連れて行ってもらいたいのです。そのときまで娘には会いません」と付け加えた。

私はかごに乗った花嫁の化粧した優雅な容姿に見とれていた、こんな美しい子なら狐であってもお嫁さんにしたいなと心底思いました。しかしすぐに、あっ自分はまさに狐に化かされる寸前にいるのだと気づき、ふらつきかけた気を強く持ちなおし、フクスケのほうを見ました。するとフクスケも私のほうを見て、人差し指を鼻の前で左右に振って「ノンノン」のジェスチャーをしました。

さて、人間に化けたのは行列に加わったものたちだけで、見送るきつねたちはおさも含めてきつねのままでした。おさはしばらく行列を黙って見ていましたが、最後尾が過ぎてゆくと「この変容は天気雨が降っているあいだだけです。やむとみんな野生の姿にもどります。」と言った。

陽光を受けた霧雨はこの行列の上にきれいな虹を立たせ、まるでこの虹も狐たちの行列の変容の一部のように見えました。そして雨がやむときつねの行列の変容が溶けるように、この虹も森の空気の中に溶けるのです。

私は、きつねのおさ（今ではきつねのおっさんと呼んでいますが）に盆踊りの日に迎えに来ると約束しました。フクスケはお礼に名物けつねうどんをご馳走になりました。私は行列のあとについて帰りたかったので、ご馳走は遠慮して先に失敬しました。

行列を見失わないよう霧雨の中を彼らが行った方向に追いかけてゆくと、来たときにはこの道はこんな広々としてなかったのに、ずいぶんゆったりとしていて、つまずいたり枝に頭を打つことももうありませんでした。

秘密の湖のほとりを通り、竹やぶのトンネルをくぐって、森の出口に近づいたころには、霧雨はほとんど上がり、虹はもう消えそうでした。足並みをそろえてゆっくりと進む行列の落ち葉を踏む足音とともにこの話もここで、溶けます・・・

第七話　　柑子（こうじ）町の盆踊り

柑子町の盆踊り大会があるその日、祭りの中で私の担当する段取りの準備を終えると、きつねのおっさんに会うために急いで森に行きました。彼と子狐たちを盆踊りに連れて行くことを約束していたからです。

さて、待ち合わせ場所であった秘密の湖に着くと、おっさんは子狐たちに囲まれて何かに夢中になっていました。わたしが来たのに気づくと、すぐにこちらにやってきて、「こんにちは、先日はどうも悪い道をおいでいただきましてありがとうございました。」と丁寧なお辞儀をして言った。

「やあ、おっさん、ごきげんよう」わたしも丁寧にお辞儀し挨拶した。

「きょうはたいそうお世話になります。子供たちはきょうの盆踊り大会をとても楽しみにしております」

「そうですか。子供たち中心の踊りの時間は５時半からです、まだ多少ひまがあります。まあゆっくり行きましょう」わたしは何かを囲んで真剣に見ているこぎつねたちが何をしているのか聞こうとすると、おっさんは言った。

「先生、実はまたひとつお頼みしたいことがあるんです。あなたはきょうの祭りの屋台店の管理責任者をされていると聞いたんですが、わたしもひとつ出させてくれないかと思いまして。」
「あっ、けつねうどんはだめだよ。あれはちょっとね」私は長年この種の管理を任されているが、食べ物を売る屋台には特に注意を払っており、衛生問題が少しでもありそうなものはみな断ってきていた。そして毒入りカレー事件の後は、料理関係はすべて町内あるいはその近隣で飲食店を営業するプロだけに許すことにした。だからけつねうどんは論外だった。
「いや、そんなんじゃないんです。わたしが出したいのは詰め将棋屋だ」
「おお、大道詰め将棋というやつかな？なつかしいね」
「うん、それです」
「おっさん、将棋なんてできるんかい？」
「何をかくそう、わたしは、長らくきつね将棋界のチャンピオンだったんです。若いときに、父から鍛えられ、やがて地元の師匠について研鑽（けんさん）し、10歳でそのころのチャンピオンを全勝で破り、玉座につきました。日本中からほとんど毎日のように挑戦者がやってきたが、十年間玉座を守りました。やがて大阪の若い狐に王座を奪われたが、連続して十年間玉座にいたということで、棋聖の称号をもらって去年引退したばかりです。今では人間の将棋クラブに行っていて、そこではもちろん負け知らずです。ここだけの話だけど、たっぷりもうけさせてもらいました。まあ人間のプロ名人にはかなわないかもしれんが、人間界の六七段の実力は持っていると自負しています。」
「それで盆踊りでも一儲けしようというわけかい」
「所場代はもちろん払います。儲けの１割２分の相場も心得ています」
「いや、そんなことじゃない。いんちきで儲けるのは困るんだ」
「私の詰め将棋にはいんちきはありません。お客さんが決して勝てないような詰め将棋はやりません。ただ簡単には私には勝てないまでのこと・・・」
「ならいいんだが・・・一手いくらだい？」
「大人百円、子供十円ですね」
「客がもし、詰めに勝ったら賞品はなんだい。」
「狐々（こんこん）堂謹製の将棋の駒を用意します。これは文字の代わりに動物たちの凝（こ）った絵があってなかなかの逸物です。きつねの家庭でこれのないのはありませんくらいはやっています。」
「ならいいでしょう。２メートル四方くらいの場所があればいいかね」
「いいですとも。」

そのとき、子狐のひとりが大きな声を上げた、「おっさん、わかった、これで詰みだ！」

「どれどれ。ちょっと失礼」おっさんは、子狐たちのいるほうに行く、そして笑い声で、「それではだめだ、ほれ、この桂馬が見えないかね。これはいただきだ、はっはっは」と言った。どうやら棋聖はもう商売道具を準備してきているようだった。

我々一行が柑子町の荒船神社に着くと、おっさんの娘とその婿の新婚夫婦が、これもうまく人間に化けて、我々を迎えてくれた。こどもたちはすぐに、出店のほうに行ってほしいものを買ったり、金魚すくいや射的に興じた。

私は、それぞれの屋台を見て回った。そして最後に、準備中のおっさんの詰め将棋屋に寄った。彼は、大きな風呂敷包みを開くと、慣れた手つきで、テーブルの上に将棋の盤面の印刷されたその風呂敷を広げ、これの四隅を石で固定した。そしてその上に将棋の駒を並べて、詰め将棋の準備が完了した。

珍しさに、子供たちや大人が集まってきた。するとおっさんはよく通るだみ声で口上を始めた。

「さあさあ、お立ち会い、御用とお急ぎでない方はゆっくりと聞いておいで　ー　お嬢ちゃんお坊っちゃん、いいこだから一歩前に出てね、そうそう　ー　さあ、詰むといえば詰まない。詰まないといえば詰む。これが七変化（しちへんげ）自在のきつねも化かされるといわれるナナバケの詰め将棋、さあ一度は見てらっしゃい、差してらっしゃい。賞品はこれ、森の動物たちが今夢中になって時の過ぎるのも忘れて楽しむといわれるコンコン堂謹製の鳥獣（ちょうじゅう）将棋の駒。嬢ちゃん坊っちゃんもすぐ覚えられる、なんとなれば、このやさしい絵入りの解説書つきだよ。これを欲しい方は、いつもは二千円のところ、きょうはここ荒船神社は私のかわいい娘が嫁いだめでたい神社だから、特別におまけして千円でプレゼントしましょう。どうですひとつ、そこの学生さん。もちろん詰め将棋で勝った名人には無料で進呈、差し代はチャラというおまけつきだよ。さあ、いらっしゃい、見てらっしゃい、差してらっしゃい」

おっさんは口上しながら、鉢巻を頭に巻いて、扇子で行く人たちを指してはその歩みを止めひきつけた。しかし、まだだれも今では珍しくなったこの一見あやしい大道詰め将棋をしてみようという勇気はないようだった。すると彼は、人並みの中の自分の娘を扇子で指して、「おっ、そこのきれいなおねえさん。いやあ浴衣が似合っててほれぼれしますね。その隣の粋な兄（にい）さんはもしかしてボーイフレンド？えっ、もう結婚しちゃった。それはそれはおめでとうございます。さあ、では亭主ひとつこの詰め将棋に勝って若奥さんに頼りになるとこを見せてあげてはどうですか？」

亭主と呼ばれたそのきつね神主は、躊躇しているようだったけど、若妻に背中を押されて、「ではいたしましょう」と風呂敷将棋盤の前に置かれたいすにすわった。少々てこずったが、彼は結局詰ませてしまった。それで鳥獣将棋の駒をもらい、箱を開けて駒を周りの人にも見せた。その駒は確かに森の鳥や動物の色絵が描かれており、裏には表の動物となんらかの関係のある動物あるいは親子の関係にあるものが墨絵で描かれていた。怪しいのは、王将になっているのは、九つの尾を持った九尾の狐（きゅうびのきつね）であった。

さて、このさくらの効果は十分あって、詰め将棋の順番を待つ人の列ができた。

これをきつねにだまされた人々ということもできるが、さくらはもともと人間が考え出したことであって、それをきつねがしたから特別扱いするのは差別である。私はおっさんを責めるやぼなことはすまいと思った。

さて、笛や太鼓の華やかな囃子とともに盆踊りが始まった。

始めは、子供たち中心の時間でしたので、ドラえもんとか、アンパンマンの曲が混じっていました。やぐらの上で太鼓をたたく人は一曲ごとに交替するのですが、そのばちさばきに見とれて私は３０分くらい鑑賞しました。６人くらいの高校生たちが、男女交互でやっていました。微妙なシンコペーションを駆使して、それぞれが自分の得意技を披露していました。女性たちは、下から見られることを意識しているのか、わざとはっぴに隠れるくらい短いショートパンツをはいて、自らを陶酔の境地に誘い込み、狂い打ちをしているかのようでした。しかし子供たちの興味はまだお菓子や、光るおもちゃのほうで、なかなか太鼓の魅力に気付く様子はありません。

大人の参加する踊りには私も加わって、時の過ぎるのを忘れて踊りほうけました。９時に予定通り祭りは終わり、後片付けが始まりました。おっさんのところに行くと、彼はいなくて、すでに子狐たちを連れて森に帰ったようでした。

おっさんがその日どれだけ儲けたかの詳細はわかりませんが、彼は東北大震災で被災した動物たちにその儲けの多くを送ったと、あとでフクスケから聞きました。
蛇足ながら、私もこの詰め将棋をして千円三百円負けました。少しは被災地の復興に貢献したことになるかもと自分を慰めています。

第八話　　土神（どじん）伝説

きつねのおっさんから聞いた話です。それはこの夏も盛りを過ぎた午後、湖のほとりの木陰で彼に将棋の相手をしてもらいながら聞きました。将棋は例の鳥獣駒を使いました。飛車角落ちにあたる龍虎落ちのハンディをもらって臨み、途中までは勝てると思っていたのですが、話に気を取られたのと慣れない鳥獣駒のせいで不本意にも負けてしまいました。さて話の発端は、王将の代わりをしている九尾の狐（きゅうびのきつね）についてたずねたことによります。おっさんは次のような話をしてくれました。

今は昔、この湖からさほど遠くないところに洞穴（ほらあな）があったそうです。そこに土神（どじん）様がすんでいたというのです。小さな神でしたが、足が速く、力持ちで、全身が黒檀の木のように黒く目がぎらぎら光って筋肉隆々でした。日本の神々の相撲大会でも優勝を何度もしたということでした。しかし性格は荒く、近隣の住民からは恐れられていました。

その土神さまのすんでいた洞穴を、みんなは「どじんさまの穴」と呼んで、人間たちは祭りのときに農作物をその穴の入口に供えました。祭りには例によって狐たちも人間に化けてまぎれていました。そしてある夏祭りのとき、どじん様は美しいきつねの娘に一目ぼれしてしまいました。きつねと見抜いていましたが、恋をすると盲目になるのは神も同じです。しかし神とはいえ、あ

るいは神であったからこそ、その気持ちをこの雌ぎつねに打ち明ける勇気はありませんでした。

そして、その冬、寒さが特に厳しく、雪も深く積もり、狐たちの中には凍え死ぬものもでました。そこできつねの長（おさ）は夜だけ寒さをしのぐためにどじんさまの穴に入ることを許してくれるようお願いしました。神は例のきつねの娘を嫁にくれるなら許すと言いました。長は、その娘にはもういいなづけがいるのでほかの娘にしてくれと言うと、その娘でなければならないと、断られました。

さて、その娘のいいなづけというのは、きつねの中でも大きな体格を持っており、次期の長（おさ）になると目されていた者です。その若いきつねは、自分がどじん様と戦って、どじん様を洞穴から追い出すので、決闘させて欲しいと長に許しを求めました。長はそれを許し、勝ったら長の座を譲るとも言った。

さて狐たちは、決闘の場所として湖のそばの一番高い踊り場のようになった場所を指定して決闘状をどじんさまに届けました。どじんさまはこれを受けました。

そして、翌朝決闘が行われました。踊り場をはさんで一方の岸辺にきつねたち、他方にどじん様を守護神とあがめるモグラたちが集まり、その他たくさんの動物らも戦いを見守りました。

いいなづけのきつねはどじん様よりも敏捷性は抜群でかつ体も大きかったので、距離を置いて引っかいたり、たたいたり、足蹴りをしている間は、きつね有利でした。どじん様は雪だまを作ってはきつねに投げつけましたが、簡単によけられてしまいます。石ころがみな深い雪で埋まっていたのがきつねに幸いしました。きつねは飛びけりを繰り返して、何とか、どじんさまを凍った湖に落とそうとしました。どじんさまはその飛びけりを何度か受けてあとずさりを余儀なくされましたが、なんとか我慢して、瀬戸際でしのぎ、やがて疲れてきたきつねの体をとらえました。互いに取っ組み合いになると、力でまさるどじんさまが優勢になります。彼はきつねの背骨を折ろうと両手を力みました。しかしきつねにはするどい犬歯があり、これでどじんさまの肩をかんで、彼が痛がってひるむすきにその手から離れました。どじんさまはまたつかみかかりました。その腕力のすごさに恐れ入ったきつねは逃げ始めました。

どじんさまも速いが、きつねも足には自信がありました。きつねは湖の周りを時計回り方向に走って逃げました。それをどじんさまが追います。岩を越え、足が沈む深雪を乱し、いちぢくの木の枝を足場にし、風にゆれるぶどうの木のつるを飛び越え、きつねは走りました。この湖は凍っていましたが、湖水が温かいので、氷は薄く、この上を走ることは危険でした（前作「秘密の湖の秘密」参照）。これも逃げるきつねには有利でした。こうして三周目にはきつねとどじんさまの距離は半周近く開きました。

しかしきつねは知っていました。自分は勝たねば負けであることを。逃げて生き延びて恥をさらすより　ー　どじんさまを倒すことがかなわないなら　ー　いっそこの神の手によって殺されたほうが名誉であることを。

そしてきつねは、三度目に決闘の場所に戻ったときに立ち止まり、追ってくるどじん様をにらみつけました。しかし彼のぎらぎら光る目をまともに見ると、からだが震え始めました。最後の飛びけりに命をかけようと思いました。しかし雪のせいでいつもの必殺のジャンプができないことを知っていました。

「どじんさま、お願いです。もし私が敗れて、あなたが私のいいなずけをおとりになったら、狐たちにどうか洞穴での越冬をもゆるしてあげてください」

そういうときつねはどじん様に飛びけりを見舞いました。しかしどじん様はそれをよけたばかりか、両腕できつねを抱きとめました。そしてそのままひざの上で暴れるきつねを折り曲げました。

きつねは背骨を折られ、息絶えてしまいました。どじんさまはそのきつねの死骸を両手で宙に上げ、凍った湖に投げ入れました。

そして、（いつのまにか人間の姿に変容していた）くだんのきつねの娘を手招きしました。「お前はもう私のものだ、さあ一緒に洞穴で暮らすんだ。」

するとその雌ぎつねは、両手を広げてどじん様に走り寄り、抱きつくと、「かたきー！」と叫びながらどじんさまもろとも湖に落ちました。そんなに大柄でもないこの雌ぎつねにどうしてそんな力があったのかは不思議です。とにかくふたりは一体になって湖に落ち、氷を割って沈みました。どじんさまは泳ごうにもきつねの娘に両腕もろとも抱きつかれて、ついにおぼれました。恋に破れたあわれな土神さまは、水の中に溶けて墨のように広がってしまいました。

その色は永らく湖をおおい、それ以後、それまでは透明だった水がにごったままです。しかし、湖水は肥沃になり水中の生物は外敵から守られ、また食べ物も増え、これによっていままでいなかった種類の動物も湖にやってきました。しかし一方、土神様がいなくなった土地のほうでは農作物がとれなくなり、人々が去ってゆき、地は荒れ放題になって今に至っています。

さて、不思議なことにふたりのきつねの死体はいつまでも浮いてきませんでした。狐たちはもちろん、森の動物たちも、決闘で敗れたきつねとそのいいなづけを哀れみ、そのせいかこのきつねたちが合体して神となって飛翔して九尾（きゅうび）のきつねになったと伝承するようになりま

した。もちろん他の地方に行くと別の伝説があり、まちまちです。上方（かみがた）の狐たちは、中国の雌狐が日本に来て、美少女に化けて鳥羽上皇をとりこにしたが、それがきゅうびのきつねになったと言っているらしい。

また動物たちはどじんさまをも哀れみました、特にモグラたちは中秋の名月には土団子を作り、湖水に供え物として沈めています。しかしいつしかどじんさまの洞穴のありかは判らなくなってしまいました。モグラの連中が知っているといううわさですが、彼らはしらを切って、知らないと言います。なんせ彼らはどじんさまを崇拝しているので、どじんさまの聖なる洞穴を守るつもりなのだろうというのが推測です。

ちょうどこの話が終わったときにわたしの九尾のきつねは逃げ場を失い、詰まされました。今思い返すと、おっさんはどうやら、話が終わるまでは詰まないように駒を手加減して差していたようです。

第九話　　尾ナシの話

夏も終わりに近づいたある月夜、私は湖畔でテント泊をすることにした。そこで午後重い荷物を担いで秘密の湖に行った。なかんずく重たかったのが、ボラ親父が所望したので買っていった日本酒一升瓶だ。

日が暮れてボートで月見酒をしているとボラ親父が現れたので、その口に清酒を注いでやった。親父は結構いける口で、飲むと陽気になり、自分の自慢話をあれこれ聞かせてくれた。ボラはそもそも海水魚だが、いかにしてこの淡水湖にいることとなったかが興味深い。

まだ小魚だったころ、竜巻によってすさまじい勢いで空中高く吸い上げられ、あっというまに冷凍され、意識がなくなった。気がつくとこの湖で泳いでいたという。要するに冷凍航空便で海から湖に直送されたわけだ。竜巻によって空中に吸い上げられた魚が地上に落下することは知られている現象であるが、運よく湖水に落ちたぼら親父は生き延びたわけだ。冷凍されて鮮度を保てたことがよかったのだろう。しかしそのため肝心なところの記憶がないので、この冒険談はこれだけ。

酒が進むにつれてぼら親父はろれつが回らなくなり、とうとう酩酊状態となり、妙な踊りをしていたが、やがて、沈んだ。

私は、残った酒を、「おれにも一杯くれや」と近づいてきた、亀の尾ナシじいにふるまった。彼が尾ナシと呼ばれているのは、もちろんしっぽがないからであるが、そのいきさつがまた面白い。酒のお礼に昔の話をしてくれた。

尾ナシが尾なしでなかったころ、彼は大きな川にすんでいた。尾ナシにとって人生は賭事（かけごと）

につきた。彼がギャンブラーとして成功した若い頃はまだ水が農薬などで汚（けが）されていなかったから、多くの種類の水中動物が池や川に生息しており、またそれを餌にする水鳥もどこにもいた。よってギャンブルに適した水鳥同士の戦いがしょっちゅう起きていた。たいておす鳥同士がめす鳥を奪い合うための戦いだったが、たまにはめす同士のおすの奪い合いもあった。ギャンブラーたちはどちらの鳥が勝つかを予想しあった。

そして尾ナシは、あらかじめ水鳥とぐるになって八百長をしくんだ。もちろんギャンブルでの儲けの分け前をあとで水鳥に配った。

じんきと呼ばれることとなるあるスッポンが尾ナシが勝ちすぎるので、何か裏があるのではないかと怪しんだ。なぜなら尾ナシは負けることはあったが、そういうときに限って掛け金は少額で、勝つときはたくさん掛けているという傾向に気づいたからだ。

尾ナシが大儲けしたある賭（かけ）のあと、じんきは相棒のすっぽんとで、メスの争奪戦に破れた白サギを襲い、相棒がその足の水かきに食いついた。痛がるサギにじんきは尋問した。「われはあのじょじょ（尾ナシの当時の名前）から金をもらって八百長をしょおったろうが。白状せえ」

「そんなことはしゃあせん、しゃあせん」そのシラサギは知らぬ存ぜぬをとおしたが、じんきの相棒はくいついた足をはなさなかった、彼もたいそうの掛け金を巻き上げられていたから。

「しらを切るなら、これでもをくらえ」じんきはサギのもう一方の足にかみついた。サギは「ぎゃっ」と叫ぶと、あわてて飛び上がった。そしてスッポンたちを落とそうと足を振った。スッポンたちは必死でし噛みついた。サギは二匹のスッポンがぶら下がっているので、すぐに疲れて落水した。そしてとうとうメス争奪戦でわざと負けたことを白状した。

じんきとその相棒はこのサギを連れてじょじょの家に行った。じょじょはすでに顛末（てんまつ）を見守っていたので、しらを切ることはしなかった。じんきはじょじょに落とし前をつけることを迫った。すなわちもうけた金をみんなに返すことと、亀賭博界のしきたりに従って、尾を詰めることであった。こうしてじょじょは金なし、尾なしになった。

スッポンのじんきはこのことにより亀仲間から崇められ神の亀すなわち「神亀（じんき）」と呼ばれるようになり、じょじょは「尾ナシ」と呼ばれるようになってみんなから笑いものにされた。

それでもギャンブルをやめられない尾ナシは、その川を去り、日本全国の川や湖水を巡りギャンブラーの人生を続けた。やがて、冬でも暖かいこの湖に来て、ひどく気に入ったので、そのままここで余生を過ごすことにしたということだ。といってもそれは戦前のことで、ずいぶん長い余生を過ごしてきたものだ。

酒をちびちびやりながら、そのような話を聞いていると私も酩酊状態になり、うとうとしているうちにボートの中で沈んでしまった。

変な夢を見た。ボートにじんきが近づいてきて「おれにもその酒をくれろ。おもしれえ話をしてやるから」と言うのだ。すっぽんにしては目が赤くぼくは「おまえはすっぽんじゃないね。目が赤い」と言うと「すっぽんの目は赤いのだ」と言いました。そんな話をしていると、こんどは土神様が赤い目をぎらぎら光らせながら泳いできて「その酒を飲ませろ」と言います。こちらは正真正銘の土神様だと思いました。「どじんさま、この酒は私がもう口をつけたので畏（おそ）れ多くて差し上げられません」と言うと、「ばかもん！」としかられました。次に寄ってきたのは何かわかりませんでしたが、やはり酒を欲しがり、断ると去っていきました。

あとで私は、自分は夢の中でもけちだなあと思いました。けちけちしないで酒を振舞ってやればよかったと思います、減るもんでもないし。

つづく

第十話　　いのししのヴル

さて、未明に目が覚めると寒い、それもそのはず自分はボートの中で眠っていた。わたしはボートをこいで岸にもどり、テントで寝直したが、眠りに落ちたのもつかの間、大きなヒステリックな声に目を覚まされた。

いさかいの声が聞こえてくる。テントの蚊よけネット越しにのぞいてみたが、声の主の姿は見えない。声音からどうやらイノシシの夫婦だということがわかる。朝っぱらから夫婦喧嘩のようだ。それにしてもまだお日様は姿を見せていないのに、参ったなあ、と思った。毎朝こうだともうここではテント泊はできないなとも。

夫婦喧嘩ではたいていそうであるようにかみさんのほうが優勢だ。それは彼女の強圧的なヒステリックな声だけでなく、だんなの「大きな声を出すなよ、まわりに聞こえたら恥ずかしいじゃないか」といういさめの語調からもうかがえる。

「恥ずかしいようなことをしているのは、誰だい。みんなに聞こえて恥になるのはあんたのほうだけだよ。」
「うりぼうたちが目を覚ます。あの子らに聞かれるとまずい。」

そのとき、雌イノシシはいきなりかみついたらしく、だんなは「あいたっ！なんてことをする！グルル」と鼻息を響かせて叫んだ。すると「この浮気者、恥を知れ！もう帰ってくるな。牝ブタと豚小屋で一生暮らしゃあがれ。この女たらしが！」というヒステリックな声が森をこだました。

静かになったと思うと、イノシシのヴルが湖畔に現れた。初めはその強いにおいで気づき。やがて足音が聞こえ、鼻息が聞こえ、そして木々の間からヴルの姿が現れた。私はこの森ではイノシシが一番危険だということをフクスケやおっさんから聞いていたので身構えた。特にこのヴルは大の人間嫌いだという。私はいざというときはテントから飛び出して、ボートに飛び乗って沖に行けば安全だと思った。

しかしその必要はなかった。ヴルのほうから丁重に声を掛けてきた。「ひろしさんとやら、朝っぱらから騒いで申し訳なかったな。目を覚まされたでしょう、せっかくの湖畔の朝なのに」
「あっ、いえ、そちらさんこそ朝からかみさんにひどいことを言われていたようで、同情いたします」
「いや、全部わしが悪いんでさあ」

しばらく沈黙が続いた。私はまだ酒気帯びの状態で、このイノシシにそれを気づかれて暴れられはしないかと心配した。なぜそう思ったかはわからない。とにかくまだテントに潜んでいることにした。

「フクちゃんから聞いたけど、動物がお好きなんだってね。・・・ひとつその動物愛に免じてものを頼まれてくれないかい、ひろしさん」ヴルが言った。

この「動物愛に免じてものを頼まれてくれないか」は言い回しがおかしいと思ったが意味はわかった。フクスケやおっさんから聞いていたヴルとはうってかわって丁寧な口調だ。あの夫婦喧嘩のせいだと思った。あんなにこっぴどくやられたらだれでもしょげるであろう。

私はテントから出た。

「なんでしょう？動物は好きですが、それは食べるのが好きという意味も含まれています」

ヴルは荒い鼻息をした。ジョークを言ったつもりだが、我ながらなんというあさはかなブラックジョークだったろうとすぐに気づき、あわてて「頼みというのは何でしょう？お聞きしましょう」と注意を逸らした。まだ酔いがさめていないのだと思った。

ヴルはやはりおかしな言い回しで話を始めたが、整理すると次のようなことを言った。

彼は、夜な夜な人里にゆき、養豚所の垣根を飛び越えて豚たちの間に飛び込み、ブタのえさを横取りして腹ごしらえをすると、雌ブタと交渉を始める。従わないメスや攻撃してくるオスにはするどい牙で脅して邪魔をさせない。初めは騒動に気づいた犬が吠えたてて、やがて飼い主がやってくるので、あわてて逃げ出していたが、あるときから事情が変った。

飼育者らはなぜか夜は犬を豚小屋から遠ざけ、あたかもイノシシの夜這いを歓迎しているかのようになった。そして交渉するだけで特に害をくわえるわけでもないイノシシのヴルの進入にブタたちもあまり騒がなくなった。こうして豚小屋はヴルのハーレムとなった。

ヴルはしばらく考え込んでから続けた。

「雌ブタたちのそばにはいつも乳を吸う子ブタたちがたくさんおります。そしてある時、その子豚の中に体に縞（しま）の入ったものたちがいるのに気づいたのです。それが私の子であることはあきらかです。この縞は数ヶ月して消え、茶系統の毛並みを持ちます。そして乳離れした子らは別の囲いに移

され、やがて殺されて肉になるのを待つのです。そのうりぼうたちのあどけない瞳をまともに見ると私はいてもたってもいられなくなって、小屋を逃げ出します。許してくれ、このおれがすべて悪い。おまえたちのような不運なイノブタを作った原因は私にある、と自責します。あいつらを救ってあげられなければ私は一生自分を責め続けることになるだろう。私はかみさんからならいくら責められても耐えていける。しかし自分からの責めには逃げ場を失うのだ。どこに行っても私は私を責める私から逃げ失せることはできない。」

猪はここで「ウーグ」と奇妙で異様な声を上げた。その声に自分でもびっくりしたかのように身震いした。

実は私はずいぶん前に、イノブタを食べたことがある。数人の友達と西沢渓谷を上り、その帰りに猪豚料理店に寄って食べた。店に入る前に、そこの飼育小屋をのぞいてみた。すると男性が餌を手ずから与えており、ぼくらを見つけると餌を差し出して、噛まないからこれを与えてみろという。ぼくは遠慮したが仲間の一人が一握りの餌をイノブタに与えるとぱくりとやられた。ただけがはなかった。

イノブタについて不案内な方々のためにもう少し説明を入れます。えっ味ですか？イノブタの脂の鮮度は高く、食べていると顔がほてってきました。

さて、この男性の話だと、イノブタを得るために、飼育者たちはイノシシの雄とブタの雌を掛け合わせます。この反対も試みられたけど、結果はうまくなかったようです。おそらく雄ブタが荒っぽい雌イノシシに興味を示さなかったのだろうと私は憶測しています。ちなみにイノブタ同士を掛け合わせてみたが、生まれるのはブタだけだということです。

こうしてイノシシを父とした猪豚の飼育と料理が始まった。私の訪れた飼育小屋では種シシはいませんでしたが、野生化していない雄のイノシシを種シシとして飼っている小屋もあるそうです。

さて種シシのいないところでは、雄シシの夜這いを必要とすることとなります。だから、飼育者たちは、豚小屋の囲いを、ブタが逃げないくらいに十分高く、しかし猪がジャンプして飛び込めるくらいのほどよい高さにしているのです。こうして雌ブタたちはイノブタを産みます。

そしてこのイノブタたちはまだ子供の頃に殺されて食肉にされます。このことがヴルの心を痛めているわけです。

ヴルは言いました。

「自分の子供たちとこの森で遊びながら、ふと豚小屋にいる幼いイノブタたちのことを考えると、心が痛みます。彼らは囲いに入れられ遊びざかりのころに、食肉にされてしまうのです。その哀れさの原因を作っているのはほかならぬおのれだ。そのおのれは、自分の育てた子供たちとのんきに遊んでいる。母イノシシにじゃれつき、私と走って戯れるここの子たちは何の心配もないだろう。

「それにひきかえ、あのイノブタたちはかわいそうだ。幼心にも、自分たちが大人になる前に屠殺されることを知っているのだろうか。もしそうだとしたら、そのことに恐れをなして眠れない夜を過ごし、眠ったら悪夢にさいなまれていないだろうか。それもおのれの夜遊びのせいだ。そんなとき、自分はまっすぐに湖に向かって走って、飛び込んで死んでしまいたいという衝動に襲われる。ウーグ。

「かみさんにああがみがみ言われていると、ついおとなしいかわいい雌ブタたちのことに気が移ります。あのきれいな肌が無性に恋しくなり、夜になると森を抜けてまた豚小屋に行ってしまうのです。そして鶏の鳴く頃まで飽食と享楽にふけり、帰ってくるとまたかみさんにがみがみやられる。これの繰り返しです。こんなおれは、ブタだ、いやブタ以下だと自己嫌悪に陥ります。」

ヴルはまた重々しく「ウーグ」とうなると、口をつぐんだ。

そのとき日の出となり、そのまぶしい光に湖面は輝き始めた。私はヴルを慰める言葉もなかった。ただ話を聞いてあげることがせいぜいだと思った。

「そこでお願いだ。一生恩に着るから、あのウリボウたちを逃がすのを手伝ってもらえませんか？」ヴルが哀願するように私を見つめて言った。

私の場合それは犯罪になる。人の財産を盗むのだから、窃盗罪に当たる。しかしその財産が生命であって、ほおっておけば殺されるのであればどうだろう。人間の法律には殺人罪というもっとも重い罪があるが、殺生の対象が食肉用動物や実験用動物ならまったく罪にならない。この格差は本当に許されることなのだろうか？法律で許されても倫理で許されないと思うのだ。ここに動物愛護法というのがどのように関わっているのかは知らない。しかしそれを知るまでもなく、殺されようとするものを救うというのは人間の本能にインプットされている。これを人の法律の足かせによって行わないのは自然法に反するだろう。殺されようとする人間を救出するなら英雄、救出されるのが動物なら犯罪者、これはつじつまが合うまい。いや理屈はどうでもいい、「ヴルさん、わかった手伝いましょう」と私は口走っていた。

こうして私とヴルは、その夜、養豚場のそばで落ち合うことにした。天気予報では大雨になるとのことだったが、むしろ好都合と思われた。

その深夜、雨の中、レインコートに身を包んだ私は、はがねのワイヤを切るための特殊カッターを持って約束の場所でヴルに会った。彼が言っていたように門には猪が通れるくらいのフラップドアがあり、我々はここを難なく抜けて中に進入した。

豚小屋には蠅や蚊を捕獲するための蛍光灯がいくつか灯っていた。

その明かりを頼りに、イノブタたちだけが入っている囲いにゆくと、ブルは言った。

「私はおまえたちのお父さんだ、ここからおまえたちを救い出すために来た。ここに残っていると・・

・命が危ないんだ」

私は１０頭いたウリボウたちに静かにするようにと言って、カッターで錠のワイヤを切り、扉を開け、彼らを外に出した。あとは門を抜けてひたすら下り坂を走って逃げるだけだ。匂いは雨が流してくれる。

ウリボウの救出は万事成功したかに見えた。しかしイノシシは見た、別の囲いで雌ブタたちの乳をむさぼっている生まれたばかりの子豚たちの中にまた新たなウリボウたちが混じっていることを。私はそれに気づいていた。そしてそれを見て見ぬ振りをしていたが、ヴルの視線はその縞の入った子豚たちのほうに釘付けになっていた。

そして「ウーグ」と奇妙な声をあげた。

「おい、そろそろずらからないと犬がやってくるぜ」私は彼をせき立てた。

「犬は顔なじみだ。私を襲わない。あんたはこの子らを連れて先に行っててくれ」イノシシは悲しそうな目を向けて言った。

「じゃあな」

私は、イノブタたちを従えて、門を通り抜けて、来た道を下り始めた。

そのとき、養豚場の中で大きな音がし、けたたましくベルが鳴り始めた。そして犬が吠え始めた。続いて「泥棒だー」という声が聞こえたかと思うと、場内の明かりが一斉に灯った。私はあわてて走り出した。ウリボウたちも走った。しかし一匹の犬がくさりを切ったらしく我々を追いかけてきた。万事休すだ。私はカッターで応戦する構えに入った。

するとその犬はいきなり「きゃいーん」と哀れな鳴き声をあげた。見るとヴルがその犬を後ろからかみついたらしかった。犬とイノシシの格闘が始まった。

「ひろしさん、私がここで犬たちを止めるから、みんなをつれて逃げてくれ！」ヴルが言った。

ほかの犬も門から出てきた。私は、一目散に坂をかけ下りた、犬たちの悲鳴を後ろに聞きながら。

翌朝、雨が上がって、イノブタたちを連れて森のイノシシの集落にいき、イノシシたちの仲間入りをさせました。しかしヴルはそこにいなかった。かみさんは旦那が帰ってこないのでおろおろしているようだった。

そしてそれ以来私は彼を見かけない。もうすぐ秋になる

第十一話　　赤毛馬の騎士

森でイノブタたちがいじめられているということを聞いたのはもう秋の虫が鳴き始めカナカナの物寂しい鳴き声が聞かれなくなった頃です。

きつねのおっさんの話によると、イノシシたちは初めはヴルの子供だというので私が連れていったイノブタたちをちやほやし、自分たちの子供らと同等に扱って何不自由なく過ごせるようにしていたが、ヴルがどうやら人間の手に掛かって殺されたか、捕獲されたらしいと知ると、イノブタたちを差別し始めた。具体的には、食物を子供たちに分け与えるとき、最後の順番がイノブタだった。

イノシシの長（おさ）はヴルの兄だったが、自分の子供たちをヴルの子供たちやなかんずくイノブタたちから遠ざけ、優遇した。そしてイノブタらは腹違いのイノシシ兄弟たちからも差別を受け始めた。差別される者が自分より弱いとみなす者たちに腹いせで差別をするのはよくあることだ。

そして、このイノブタたちを救い出すために父ヴルが危険を冒し、その結果森に帰ってこなくなったことも彼らをしてイノブタらをよけいに迫害せしめた。

ヴルはイノブタたちにとっても父親である。初めて来た慣れない森で唯一の頼りとなるはずだった父を失った悲しみの上に、いじめがのしかかってきた。

イノシシの子たちはイノブタたちにじゃれついているように見せて、いじめて、けがもさせているのだった。１０頭いたイノブタたちはどういう訳か７頭に減って、残ったイノブタたちも森に来たときよりかなりやせ細っているという。放っておけばイノブタたちは冬にはみな餓死するだろうときつねのおっさんは言っていた。

ある朝、私は、イノブタたちを救うために、食料を詰めたザックを背負って森に入った。

そして、イノシシの集落に近づいたときに、馬の荒い鼻息の音を聞いた。見ると全体が赤毛の馬がこちらのほうにやってきている。それに乗っているのはこの世のものとは思えない異様な顔をした人でした。片手に剣を持っています。私は怖くて、しゃがみこみ、地面に伏して、そちらを見ないようにしました。

その人は馬を私のそばで立ち止まらせ、「恐れることはない、顔を上げなさい」と言った。

「あなたはどなたですか？」とおそるおそる顔を上げながら私は震える声で言った。若いのか年寄りなのかもわからないし、男か女かもわからないし、日本人か外国人かもわからない顔つきです。声にしても、同じです。

その人は言った、「私は、地より平和を奪い、生きとし生けるものに殺し合いをさせる者だ。万物を争わせ、それを秩序とするのが私の責務だ」

「あなたがこの森に来られて、いじめが起きています。両親のいない弱いイノブタたちが犠牲になっています。」私は勇気を奮って言った。

「私が通り過ぎるところには争いが起きる。生きとし生けるものは弱者をねらい、弱者はさらに弱い者をねらう。そしてそれらの弱者は寄り集まりひるがえって強者をねらう。それが秩序だ」

「そのような秩序は悪です。倫理や道徳に反します」私は反論した。

「おまえたちのいう倫理や道徳というものを越えて、秩序がある。」

「あなたは悪魔ですか？」

「悪魔は秩序を乱す。私は秩序を守るのだ」

「ではあなたは秩序のために争いを起こさせるのですか？」

「秩序のために争いを起こさせる。私のあとから来る者は、死をもたらすであろう。」

私は返す言葉もなく、去っていく馬上のこの人の後ろ姿を見送った。そこに神々しさを見た。

生物は確かに秩序というものの上に存在している。そしてその秩序は絶え間ない弱肉強食による自然淘汰の循環を骨格にして守られている。この循環を止めようとする道徳とか倫理というのは焼け石に水のように非力なものだ。法律もそうだ。秩序の必然の要素として争いやいじめがあるのなら、これを受け入れねばならない。

いじめの根源について、私には持論がある。ある種族のペンギンの母親は、卵を二個産む。そして雛がかえり、これらを比べ、より元気のいいほうにえさを与える。そして、他方は放置するか、ひどいときには害を与え、早死にさせる。ここに幼児虐待の起源を見た気がした。こうして比較的強者が生き残るので、種全体にとっても生存力が向上し種保存が保証される。

そうすると、この弱いほうの雛が、この逆境にも関わらず、生き延びる方法はおそらく一つしかない。それは自分が死ぬ前に、強い兄弟を怪我をさせて自分より弱者におとしめ自分が比較的強者の立場にのし上がる、あるいは死亡させて、母親から自分以外の選択肢を奪うことだ。ここにいじめの根源を見る。人間の場合一対一ではかなわないから、比較的弱者が集団を作り、ターゲットの強者を一人だけ絞り込んで、アタックをかける。これが弱者の生存競争におけるおそらく一つしかない生存のための手段であるなら、善悪などという人間思想を越えて自然が与える正統なテクニックとしてとらえられるべきであろう。

そのようなことを考えながら、その人と赤毛の馬の姿が視界から去っていくのを見届けた。次に来るのが死をもたらす者なら急いでイノブタたちを助けねばならないと思った。しかしそれは秩序を乱すこと

になるのだろうか？かの人はそれは悪魔のやることだと言った。

イノブタを連れてきたことがこの森の生態系という秩序を乱すだろうことはわかっていた。イノブタのメスたちはやがてイノシシとの子を産み、より生命力のあるイノブタが増え、やがて純血のイノシシはこの森から駆逐されるであろう。そしておそらくそのような秩序の乱れを防ぐべく、この森はあの赤毛馬の騎士を呼んだのだ。早いうちにイノブタたちを駆除しようとしているのだ、イノブタが増えて手に負えなくなる前に・・・

しかし私はとりあえず持ってきた食べ物は飢えたイノブタにあげようと思った。

「しかし」とまた私は思った。かのひとが言ったことは矛盾しているわけではない。これからまたイノブタ料理を食べることがないとも限らない私が倫理だの道徳だのという資格もない。その時々のセンチメンタルなかつ瞬間的な独善的偽善行為により自分は動物愛護家だと悦にいるのは情けない。そしてその一時的行為が秩序を乱す悪魔のやることだということに反論はできない。

わたしは、あとに来る死をもたらすという者に会うのが怖くなり、イノブタ用の食べ物を詰め込んだザックを残して、森を出ようと急ぎ足で赤毛の馬と神々しい人の行った方向に進んだ。そしてそのときだ、すでに聞き慣れたイノブタの泣き声が聞こえてきた。イノシシの子らに追われてキーキー泣きながら一頭のイノブタが私のほうに走ってきていたのだ。それはやせ細り、顔から血を流していた。

そのとき私の体内に起こった突発的な怒りは抑えることのできないものだった。私は引き返し、ザックを拾い、それを振った、投げつけた。

終わったときには、牙（きば）の生え始めたイノシシの子たちの死体がいくつか目の前に転がっていた。

「ヴル、おまえが何の心配もなく暮らしている、と言っていたおまえの子らをおれは殺してしまったようだ。秩序を乱してしまったな。確かに悪魔のしわざか・・・」

すると森の奥の方の木漏れ日に照らされて一頭の馬が現れた。それは青ざめていた。誰かがそれに乗っている。私は一目散に森から逃げ出した。

完

長光一寛

写真(photos):
amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro